

本田初期ウンカ類の防除について

滝口政数*・酒井久夫*・熊本勝巳*

TAKIGUCHI, M., SAKAI, H. and KUMAMOTO, K. Effect of Sevin in the Control of Rice Plant Hoppers.

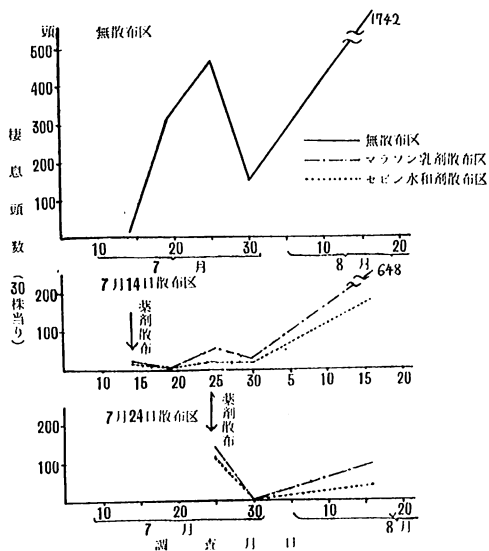
福岡県において普通水稻のニカメイチュウ一化期防除の際、セジロウンカの併殺をねらつてメチルパラチオンを散布しても防除後にセジロが多発する事が多く、更に8月中旬頃(第3~4世代)あらためて防除する事が多い。そこでメイチュウ防除の際効率的にセジロ、ツマグロをも適確に併殺防除し得る方法を検知するために試験を行った。すなわち分けつ期前後のNAC剤散布が幼穂形成、稲孕期前後のウンカ類の発生に及ぼす影響を昭和34~35年にわたつて調査した。

昭和34年度 ニカメイチュウの一化期防除には移植後10~20日前後に薬剤散布するが、この時期にはセジロは本田に成虫が飛来し産卵~孵化時期にあつている。この頃散布時期を変えNAC剤(セビン粉剤1.5%)を7月17日、24日、31日に動力散粉機で1回あて圃場に散布して其後のウンカ類の発生活消長を調査した。

本年度はセジロ、トビイロ共7月11~14日に異常飛来があり、17散布区では27日前後よりセジロ幼虫が発生して8月中旬には無散布と同程度の棲息量となつた。24日、31日散布区では散布後孵化幼虫が散見されたが8月中旬には殆んど問題ない棲息量であつた。

昭和35年度 セビン水和剤、マラソン乳剤1500倍液を7月14日(産卵期目標)、7月24日(孵化幼虫目標)に1回あて10a当70l散布して其後のウンカ類の

第1図 セビン・マラソン剤の散布時期とセジロウンカの発生活消長



発生活消長を調査した。

本年度セジロは7月10日に異常飛来があり、20日頃から幼虫が孵化して8月中旬に次世代の虫が多発した。7月14日散布ではセビン・マラソン散布区共一時密度は低下したが、下旬になると孵化幼虫が出て来た。セビンとマラソンの薬剤間ではセビン剤の方が発生量少く、特に8月中旬にはマラソン剤区が無散布区

の1/3程度であるのに対し、セビン剤区は1/10程度の発生に留まっている。更に7月24日散布では散布幼虫が孵化しつつあつたが、散布後棲息は激減し8月中旬でも非常に棲息は少なかつた。特にセビン剤の方がマラソンに比較して孵化幼虫に対する残効が永いようになりうかがえた。ツマグロについてもほぼ同様の傾向であつた。

実際一般散布でメイチュウ防除の際、メチルパラチオン剤にNAC剤を加用してどの程度8月中旬のウンカの発生を抑制できるかを太宰府町の水田1.7haで実施した。第1回7月8～9日にメチルパラチオン乳剤を散布した後、第2回目、無散布区(2回目の防除を行わない)、単用区(メチルパラチオン乳剤1500倍単

用)、混用区(メチルパラチオンにセビン水和剤1500倍加用)の3区にわけ7月24日10a当140lあて動噴24頭水平式噴口で散布した。その結果8月18日の調査では無散布区が3.3m²当5000頭以上の棲息であるのに対し、単用区で600頭、混用区で100頭以下の発生であつた。

セジロウンカの本田移植後の異常飛来日は毎年多少の時日のずれはあるが、分けつ初期セジロの産卵期よりむしろ幼虫孵化期に、換言すればニカメイチュウ防除の第二回目散布時(7月第5半旬)にNAC剤を混用散布してセジロの孵化幼虫を防除すれば8月中下旬の加害を著しく防止出来るようである。